



南山大学は、中部地区唯一のカトリック大学で、日本における男女共学のカトリック総合大学は、南山大学と上智大学の2校です。世界各地で多くの人々に共有されているカトリック教会の伝統や価値観を受け継ぎ、本学は「キリスト教世界観に基づき学校教育を行い、人間の尊厳を尊重かつ推進できる人材の育成」を

Q1. モットーの発案者は。

A1. 長年、南山学園の理事長を務めたアルベルト・ボルト神父がモットーの発案者です。ボルト神父は、昭和10年の来日以来、40余年もの年月を日本で過ごしており、81年の生涯のうち人生の大半を日本に捧げたとと言っても過言ではありません。神父は、日本に派遣された当初、新潟、鶴岡、東京などで宣教活動に従事していました。柔和で人の話に熱心に耳を傾ける神父は、どの教会でも愛と信頼をかち得、特に若者や貧しい人たちの支持は絶大でした。南山学園の仕事に携わるようになってからも、神父の真摯な態度は変わらず、学園の中枢として、理事長、学園長など主要な役職を歴任する間に、学園は順調な発展を遂げたとされています。



初代学長
アロイジオ・パッヘ神父

誕生しました。憲法にあたる基本法第1条第1項は、過去への反省と未来への誓いを重ねる形で、「人間の尊厳は不可侵である。それを尊重し保護することはすべての国家権力の義務である」と宣言しています。初代学長をはじめ大学開設に関わった多くの人々がドイツ人だったということもあり、「キリスト教世界観に基づく学校教育」という建学の理念を端的に表現するため、「人間の尊厳のために」という言葉を大学の教育モットーとして掲げ、1952年、「Hominis Dignitati」という標語を南山学園講堂の玄関に掲げました。



南山学園講堂玄関に掲げられた「Hominis Dignitati」

Q2. モットーとして選ばれたのはなぜですか。

A2. 1947年のある日、アルベルト・ボルト神父が上智大学から四谷駅に向かう途中、突然、「人間の尊厳」という言葉が思い浮かび、これこそ今の社会に最も大切なことであるという考えが神父の心を強く捉え、モットーとして選ばれました。当時、「人間の尊厳」は、世界の至るところで話題になっており、実際、1945年に連合国がサンフランシスコで調印した国連憲章にも「人間の尊厳」を確認する宣言が含まれています。



アルベルト・ボルト神父

Q4. モットーの内容を教えてください。

A4. 日本のカトリック大学は、いずれも人間形成の基礎をキリスト教的人間観に置いています。カトリック大学の教育理念として共通に確認されている定義は、「キリスト教によれば、人間は独自の尊厳を有する人格的存在として神によって創られ、神に向かうものである。その人間の完成は、自己が有限であり他者に開かれた存在であることを悟りながら行う他者との対話、交わり、すなわち愛のうちに実現される」とあります。本学の開学以来、教育モットーとされる「人間の尊厳のために」は、この理念の端的な表現に過ぎません。

本学で行う教育・研究の全ての活動が人間の尊厳を保護し、推進するためにある

Q3. その時代背景を教えてください。

A3. 1947年の学校教育法に基づく学制改革により、1949年名古屋外国語専門学校が南山大学となり、アロイジオ・パッヘ神父が初代学長に就任しました。その開学式典の2日前、ナチスの不法国家が残した廃墟の中から新生ドイツ連邦共和国が

NANZAN bulletin

南山大学広報誌

vol.155
2005.12.20



CONTENTS

特集 Feature Article
人間の尊厳のために
Information
学生納入金改定について
Campus Topics
野外宗教劇

私の研究
「中世西洋典礼史に学ぶ」
西脇 純 人文学部キリスト教学科助教授

私のクラス
「異なる社会を経由して考える」
森 千香子 外国語学部フランス学科講師

〈表紙:クリスマス馬小屋(瀬戸キャンパス)〉



Information

■2006年度学生納入金改定について —改定方式を一部変更 授業料、施設設備費とも据え置き—

2006年度南山大学学生納入金について、2005年9月30日開催の南山学園理事会は、「入学に際しての宣誓」に示されたスライド制による授業料の算出根拠のうち、2006年度授業料算出においては、教育研究条件改善計画に応じた改定率(増額に作用、上限3%)を+0.3%とし、授業料を据え置くことを決定しました。あわせて、施設設備費についても、現状でも大学の施設設備取得費および維持経費増には対応可能と判断し、2005年度と同額とする決定をいたしました。

スライド制による授業料は、教育・研究条件改善のための改善率(上限3%)と、学生一人当たり総経費増減率となる人事院勧告による国家公務員給与改定率を合算して授業料改定率を算出しています。2006年度授業料の場合、教育・研究条件改善のための改善率が+0.3%、国家公務員給与改定率が-0.3%であるため、授業料改定率は0%となります。

【名古屋キャンパス学部学生】
授業料を現行の718,000円に据え置くとともに、施設設備費を現行の210,000円に据え置く。

【名古屋キャンパス大学院学生】
法務研究科を除く研究科については、授業料を現行の574,000円に据え置くとともに、施設設備費を現行の105,000円に据え置く。

法務研究科については、授業料を現行の1,000,000円に据え置くとともに、施設設備費を現行の200,000円に据え置く。

【瀬戸キャンパス学部学生】
名古屋キャンパス学部学生の授業料に、総合政策学部は100,000円、数理情報学部は200,000円をそれぞれ加算して算出する。総合政策学部は現行の818,000円を、数理情報学部は現行の918,000円を据え置く。施設設備費は名古屋キャンパス学部学生と同額とし、両学部とも現行の210,000円を据え置く。

【瀬戸キャンパス大学院学生】
総合政策研究科は現行の624,000円(社会人学生は654,000円)を、数理情報研究科は現行の674,000円(社会人学生は734,000円)をそれぞれ据え置く。施設設備費は名古屋キャンパスの法務研究科を除く大学院学生と同額とし、現行の105,000円を両研究科とも据え置く。

(総務部)

【名古屋キャンパス学部学生】
授業料を現行の718,000円に据え置くとともに、施設設備費を現行の210,000円に据え置く。

のために

建学の理念としています。この建学の理念に具体的な方向性を与えるために、創立当初から「人間の尊厳のために」(ラテン語でHominis Dignitati)という教育モットーを掲げています。

今回は、「人間の尊厳のために」について皆さんに知ってもらいたいと思います。



人文学部キリスト教学科教授
ハンス ユーゲン・マルクス 学長

ことをこのモットーは宣言しています。実際、建学の理念であるキリスト教世界観ないし、キリスト教精神の要は、一人ひとりの人間が神の似姿としてこの世に生まれてくるかけがえのない存在であり、それゆえ、まさに一個人として侵すべからざる尊厳をもつという考えなのです。したがって、本学で行う教育の目標は、学生一人ひとりが自らの尊厳に目覚め、ひいては他者の尊厳を認め、それにもとづいて、ともに社会に奉仕するという姿勢を育むことです。

このような人間の尊厳をしっかりと把握し、これを尊重しつつ生きていく人間になるようにという願いがモットーに込められているのです。

さらに大学行事である入学式、卒業式では、カトリック司祭による「祈り(ミサ)」が行われ、ミッションスクールならではの荘厳な雰囲気の中、学生を祝福し、世界の平和を祈ります。宗教色を醸し出した伝統的行事としては、今年で39回目を迎えた野外宗教劇「受難」があります。キリスト教信仰を中心テーマに野外宗教劇部の学生が熱心に取り組み、「パッヘ・スクエア」と呼ばれる名古屋キャンパスの芝生広場で公演が行われます。当日は、学生や教職員をはじめ、一般の方々も足を運びます。



野外宗教劇「受難」

Q5. 南山大学ではこのモットーを学生あるいは社会一般にどのように伝えていますか。

A5. 本学はカトリック大学ですが、学生、教職員ともに必ずしもキリスト教信仰を重要していません。

学生に対しては、「人間の尊厳のために」を学ぶ機会として、「人間の尊厳科目」という授業を設けています。2年生から4年生までの全学共通教育科目で、選択必修です。本学の教育モットーである「人間の尊厳のために」と直接関連する科目として、人間や人と社会・科学・学問との関わりなど広範な分野にまたがるテーマを学びます。また、今年4月から9月にかけて、愛・地球博開催期間に合わせて「人間の尊厳科目」開講10周年を記念し、連続9回の講演会を開催しました。本学の建学理念を具現した倫理性を培う教育内容が社会一般においても大きく関心を呼び、改めて社会から強く求められていることを実感しました。

また、2002年には大学の新しいコミュニケーションロゴ・エンブレムを制定しました。ロゴは、ZANを上昇させ、NとZを交ぜ合わせ、プラス思考・交流をイメージさせるクロスを形づくったデザインです。クロスはキリスト教の精神を表すと共に、今まで培ってきた伝統を大切にしながら、新しい付加価値を創造し、未来へ展望していこうとする「伝統と未来の調和」を象徴しています。ZANが上がっている形状は、向上心とチャレンジ精神など前向きな上昇志向を表現しています。エンブレムは、コミュニケーションロゴのコンセプトと連動させて象徴性と権威性を強調したものです。NANを縦に、ZANを横に組合せ、人が手でクロスを描いた形を表し、キリスト教の精神を象徴した独自性と知性の標章です。クロスの中にはアルファベットの先頭文字Aが重なっています。Aは「No.1、最高位」を意味し、国際的にもトップに輝く南山大学を表しています。

このように本学の目標や理念をイメージとしても学内外にアピールしています。



「人間の尊厳科目」記念講演会



■南山ビジネススクール開設

2006年4月、東海地区初のビジネス専門職大学院として、ビジネス研究科ビジネス専攻を開設します。入試日程は次のとおりです。

出願期間	2005年12月15日(木)~12月21日(水)
審査日	2006年1月14日(土)

出願期間	2006年2月20日(月)~2月24日(金)
審査日	2006年3月11日(土)

■退職 2005年9月30日付
徳永 俊史 助教授 経営学部

■訂正
NANZAN bulletin vol.153
Information「鈴木孝夫氏に名誉教授称号授与」
本文2行目
(誤)人文学部 (正)外国語学部

発行 南山大学学長室
〒466-8673 名古屋市昭和区山里町18
TEL. (052) 832-3113 (直通)
e-mail: gaku-koho@nanzan.ac.jp
http://www.nanzan-u.ac.jp

Special Events

フランツ・エデルマン・ファイナリスト賞を受賞！

2005年、南山学園は米国オペレーションズ・リサーチ(OR)／経営科学学会(INFORMS)の伝統ある賞、フランツ・エデルマン賞で、最終審査を受ける6件に選ばれました。ゼネラル・モーターズ(GM)に受賞は譲りましたが、最終審査を受けた組織に贈られるファイナリスト賞を受賞しました。受賞を記念し、10月28日、INFORMSから、前経営科学学会(TIMMS)会長のピーター・ノルデン博士、伊倉義郎博士をお招きし、名古屋マリOTTアンシアホテルで授賞式を行いました。日本OR学会会長の今野浩中央大学教授をはじめとする学界、名古屋の産業界、マスコミ関係など80名を超える方々にご参加いただきました。

フランツ・エデルマン賞は、米国のOR／経営科学のプロジェクトチームを編成し、めざましい成果を挙げたフランツ・エデルマン博士にちなんだ賞です。TIMSは彼の業績を称え、ORの実践を奨励するために、この賞を設けました。この賞はTIMSから、TIMSが米国OR学会と合併して発足したINFORMSに引き継がれ、2005年で34回を迎えています。過去の受賞は、モトローラ、カナディアン・パシフィック鉄道、コンチネンタル航空、メリルリンチ、IBM、AT&Tなど米国をはじめ、世界各国を代表する大企業です。

南山は、2005年4月、米国カリフォルニア州パームスプリングス市で開かれたINFORMSの全国大会で、GM、アテネオリンピック実行委員会、プロクター&ギャンブル、食品会社のスイフト、製薬会社のイーライリリーとともに、最終審査にのぞみ、マルクス学長、数理情報学部の長谷川教授、澤木教授、鈴木で南山のORを用いた業務改善に

高校生も授業に参加!「体験入学会」

10月10日、南山大学名古屋キャンパス（以下NNC）および瀬戸キャンパス（以下NSC）で体験入学会を開催した。高校生の皆さんに実際の授業、模擬授業、大学生活を体験してもらうために企画したイベントである。当日はあいにく小雨が降ったり止んだりの天気だったが、北は岩手県から南は長崎県まで、幅広い地域から両キャンパス合わせて616名が本学を訪れた。授業のほかに学生入試広報スタッフの引率によるキャンパスツアーにも参加し、積極的に大学を体験する姿が見られた。



名古屋キャンパス ドイツ語コミュニケーションの授業風景

NNCの開会式ではマルクス学長の挨拶、学生入試広報スタッフによるオリエンテーションが行われ、その後、配布されたキャンパスマップをもとに参加者は各自で教室に向かった。午後からの開催だったため、開会式の前後に学生食堂で昼食をとる参加者の姿も見られた。3時限目、4時限目には、参加者520名がそれぞれ興味のある学科の授業、模擬授業、説明会に参加した。その後、学生入試広報スタッフが中心となり、図書館やキャリア支援室などの施設を紹介するキャンパスツアーに149名が参加した。

一方、96名が参加したNSCでは、学部説明会、

ついで発表しました。GMの2000億円のコスト削減に対し、南山は約3億円と削減金額が3桁違い。また、発表の準備にもGMはお金をかけていました。しかし、我々の発表も聴衆から高い評価を受けました。発表が終わったときには、多くの聴衆から握手を求められ、非常にうれしかったです。発表の評価はGMと対等だったと思います。

今回の受賞は、マルクス学長をはじめとする大学執行部がORを適用して、業務改善しようという強い意思を示してくれたからこそ実現しました。事務職員の皆さんにもよく協力していただきました。この場をお借りしてお礼を申し上げます。現在、ORを用いた業務改善は、プロジェクトNとして継続しています。プロジェクトNは、教員と事務職員が協力して、現在直面している難問をORの考え方で解決していく場です。図書館の雑誌購入の見直し、東海・東南海地震注意情報発令時の対応策の策定、入試広報の方法の検討など、毎月1回の会合では、メンバー全員で知恵を出し合っています。皆様のご協力をお願いするとともに、何かお困りのことがありましたら、是非お気軽にご相談ください。

（数理情報学部教授 鈴木 敦夫）



石田市長による講演

体験授業、個別相談会、キャンパスツアーを実施した。総合政策学部の説明会は、在学生会がパネリストや進行役となり、趣向を凝らした企画を行った。数理情報学部では、プログラミング実習の授業を見学した後、情報通信学科と情報システム数理学科（数理科学科より名称変更）に分かれて模擬授業を行った。また、個別相談会場には「学長と語ろう」コーナーが設けられ、和気あいあいとした雰囲気の中、多くの高校生、受験生が学長と楽しく懇談した。

参加者から回収したアンケートによると、「本物の授業は難しかったけれど、雰囲気がよくかった」「大学案内には載っていない説明を聞くことができて良かった」「キャンパスツアーの引率をしていた学生がとても優しくかった」など、好意的な感想が多かった。

実際に在学生の授業を体験してもらうために、NSCでは一昨年から、そして昨年からは両キャンパスでこの体験入学会を実施しており、多くの参加者から好評を得ている。最近の傾向として、年々このようなイベントに保護者の方々の参加が多くなってきたことが挙げられる。来年度は、保護者の方々を対象とした大学説明の時間を設けることも考えていきたい。（入試広報委員会委員長 青柳 宏）



瀬戸キャンパス 相談コーナーの様子

第33回 父母の集い

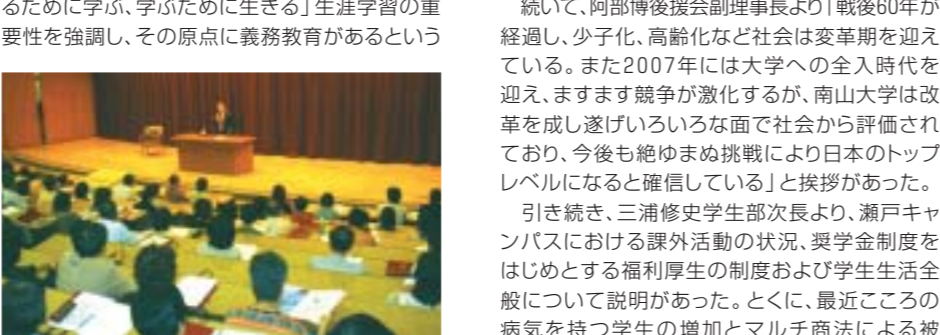
南山大学は10月1日、名古屋・瀬戸両キャンパスで南山大学後援会との共催による「父母の集い」を開催した。今年で33回を迎えるこの行事は、在学生のご父母に本学の教育・研究や就職支援等の活動についてご理解をいただくとともに、本学へのご意見・ご要望を伺う貴重な機会となっている。

名古屋キャンパス

名古屋キャンパスで約500組のご父母が参加され、このことは「後援会」を構成するご父母が、積極的に大学運営を支えてくださっていることの表れと深く感謝したい。

G30教室を使用した午前中の全体会第1部では、マルクス学長、桑原教行後援会理事長の挨拶に続き、「学生生活について」「学生の海外留学について」「職業指導の基本方針および今年度の就職状況について」それぞれの担当責任者より、本学の取り組みや実情の説明があった。就職状況の説明では、就職率や内定率など普段何気なく耳にする数値の計算方法やその実態について真剣な眼差しで聞き取っていた。

引き続き第2部では、石田芳弘犬山市長による「まちは一つのテーマパーク」と題した講演が行われた。石田市長は、まちなみ明確なアイデンティティが必要との考えから、犬山市が持つ歴史や文化をいかしたまちづくりに積極的に取り組む一方、中央教育審議会の委員を務めるなど、犬山市のみならず日本の教育改革を先導している。「生きるために学ぶ、学ぶために生きる」生涯学習の重要性を強調し、その原点に義務教育があるという



石田市長による講演

石田市長の言葉には重みと説得力があった。

午後は、学科懇談会（一部の学科）、指導教員との個別懇談（事前申込制）を開催すると共に、留学、就職など学内各所に相談コーナーを設け、全体会では対応しきれない細かな相談の場を提供し、多数のご参加をいただいた。また、普段の大学生活の一端に触れていただけるよう学内施設、課外活動の見学を自由に行っていたいただいた。

かつての自分の姿と、成長したご子女の姿を重ねあわせてご父母も多かったのではないだろうか。なお、折角の機会と、遠方から参加されたご父母に南山大学の全てをご覧いただくまでの余裕が無いことについては今後の課題とさせていただきます。（総務課長 三谷 靖司）

Nanzan Square	南山大学建築探訪 「The "Four Winds"」	
瀬戸キャンパスのシンボルマークとして、A棟（事務・教室棟）の壁面にThe "Four Winds" のモニュメントが掲げられています。南山学園のシンボルである「翼」、「麦」、「十字架」をモチーフに、四方に広がる風と海を表し、ここで学ぶ学生たちが世界へはばたいていくことを願うものです。	神宮会員ジョン・コンリス師 制作	

Campus Topics

野外宗教劇「受難」の歴史

今年で39回目を迎える南山大学の恒例行事「野外宗教劇『受難』」の公演が10月8日、名古屋キャンパスのパッヘ・スクエアで上演された。今回はこの恒例行事の歴史について紹介したい。

『10年の歩み』によると、文学部仏語学仏文学科の学生小谷昭彦氏が仏文学史の講義で宗教劇の話聞いたことが事の始まりだ。パリのノートルダム寺院の前での復元の上演のことを聞き、幸いそれに使うグレバン原作からアレンジした台本が手元にあったので、ひとつやってみるかと思を上げた。しかし急には翻訳が間に合わず、第1回公演では上智大学教授のホイヴェルス神父作『受難』の台本を借用した。主だったスタッフはわずか3名で、小谷氏はキャストとしても主役のキリストを演じ、他のキャストやエキストラと合わせて総勢100名以上を動員した。当時、仏文学史を担当していた木村太郎教授の協力を仰ぎ、第1回公演は、1963年11月11日、南山学園付属聖堂前で行われた。第2回公演からは、グレバン原作『受難』を木村教授が翻訳した台本を用いた。そこにアレンジを加えたり音響効果を工夫したりして独自の『受難』が作られていった。第3回公演から新しい舞台演出を試み、当時の図書館前に場所を移した。協力者も増える中、自動車部、水

International Friendship NAPIに参加して

NAP（南山アジアプログラム）とは、Nanzan Asia Programの略。2年次の夏・春の長期休暇を利用してアジア諸国・地域（台湾、韓国、フィリピン、ベトナム、タイ、マレーシア、中国の7カ国）で約4週間現地の言語や文化を集中的に学ぶ総合政策学部のプログラム。

私はNAPで語学研修とフィールドワークを行った。NAPでの想いを綴った"心のノート"を今、紐解こう。“人にはそれぞれ個性がある”その言葉を私たちは至極当然のように受け入れる。ではここで敢えて問う事にしたい。“個性”とは何なのかと。

現代に生きる人々は常識という枠に縛られ、他の考え方を排除しようという考え方が染み付いてはいるが、かといって常識と呼ばれる枠から逃れることを望んで止まない。“和”を重んじる文化圏に生きる私たち日本人にとって、欧米からもたらされた“個”の精神は私たちに無視することのできない矛盾を生み出した。これら現代日本の抱える深刻な問題について、解決の糸口を私たちは真剣に考察すべきである。そのような事を思いながらNAPIに参加してきた。

異文化圏での生活は戸惑いと新鮮な驚きをもたらしてくれた。日本での常識が

語学研修 修了式（台湾）

取材：小寺 良奈（日本文化学科4年）

泳部、ワンダーフォーゲル部が協力し、スタッフ、キャストで総勢200名を超え、観客は2000名に近かった。野外宗教劇「受難」は回を重ねるごとにパワーアップしていった。第10回公演の後、全国を吹き荒れた大学紛争の影響などで後継者が育たず、1948年に降公演は中止されていたが、1977年に再開されてからは毎年行われている。

野外宗教劇「受難」は、一学生の一声で始まり、今日まで本学の伝統を代表する行事として引き継がれている。小谷氏は「敬けんな宗教心から私の野外宗教劇は計画されたものではなかった。ただ何かでっかいことをやりたいという青春のヒロイズムが私を駆り立てたのである」（第6回公演のパンフレットより）と思いを寄せている。今後毎年ごとに新しい『受難』劇を展開し、よりいっそう多くの観客に野外宗教劇の魅力を届けてくれることを期待する。

【参考文献】『10年の歩み』（南山大学野外宗教劇OB会、1972年5月）【真正受難劇】（原作：アルヌール・グレバン、翻訳：木村太郎、南山大学野外宗教劇OB会、1972年5月）【南山プレテン!】第40号（1977年12月）



フィリピン子どもたち

通しない世界は、自分を客観的に見る機会を与えてくれる。それにより自分と他人の差を明確に感じることがができる。重要なのは何事も積極的に参加し、その都度自分の意見をしっかりと持つことにあると思う。その積み重ねが“和”の中で“個”を生み、それが自分の個性であると認識できるようになる。

“和”と“個”の関連だけでなく、自分と他人の差だけでなく、以前の自分と現在の自分の差一つまり成長も確かに実感してきた。それは日々の授業、ストリートチルドレンと遊んだこと、ゴミが山のように堆積されたスモークマウンテンといスラム街でのホームステイ、…思い出すといくつものあの頃が浮かび上がってくる。日々起こる出来事、それに伴う自分の中の変化、また自分が変わっていくと、それによって起こる出来事も変わっていった。自分の気持ちが行動を変え、出来事を充実したものにする。日々変わっていく自分がいた。遅くなっていく自分がそこにいた。その根拠は昨日より前に進もうとしていた自分がいたこと。さまざまな人との出会い、さまざまな出来事との出会い、驚き、悲しみ、嬉しさー。すべてに会えてよかった。変わっていく自分にも。そんな僕らのNAPIは、いつまでも心に残る出来事だった。

私の研究 中世西洋典礼史に学ぶ 西脇 純

私の専門は典礼学です。典礼学はキリスト教神学の一分野で、ミサ、結婚式、復活祭、クリスマスといったキリスト教のさまざまな祭祭や宗教慣習について、その祝いの神学的内容や意義などを多角的に研究する学問です。なかでも私は典礼を歴史的な側面から考察する「典礼史」に惹かれています。

典礼は古来、信仰が表明されかつ表現される場として、信徒の信仰生活の中心を成してきました。たとえば典礼文（祈祷文）はいわば信仰の表明文といえましようし、典礼音楽はその信仰を音楽によって表現しようとする試みといえることができます。キリスト教のドグマ（教義）が、時代ごとの制約の中で、あるいはそれぞれの地域の文化文脈において典礼という場でのように言語化され、どのような芸術表現が生み出されていったのかを探ることは、大変興味深い研究テーマでもあります。むろんドグマそれ自体もある特定の文化表現をとることはいうまでもありません。

こうしてみると、典礼学には幅広い研究領域が拓かれていくことがわかります。私はとりわけ西方キリスト教の典礼史に関心があり、博士論文では、四世紀のミラノ司教アンブロジウス（397年没）の典礼観と、彼のミラノ教区内での典礼実践を研究テーマといたしました。ところが論文をご指導くださった恩師は実に多くの専門をお持ちの方で、その一つが中世典礼史でした。先生はことあるごとに、「中世は実に創造的な時代でしたよ」と実例を挙げておもしろおかしく解説してくださったのです。その恩師のお話を伺ううち、私の関心も次第

私のクラス 「異なる社会を経由して考える」 森 千香子

フランスから1万キロも離れた日本で、「フランスの社会」について学ぶことの意味は何か？そう聞かれたら、私はこう答えるでしょう。フランス社会に関する知識を蓄積するのもしいけれど、それだけではつまらない、あまり意味がない、と。これらの知識を、自分自身や自分の生きる社会に、何らかの形で接続することができて、初めておもしろくなってくると。もちろんこれはフランスに限らず、あらゆる「異文化／社会」研究に当てはまることです。

異なる社会の考察を通して、新しい目で自分の社会を振り返り、当たり前になっていた「常識」や「フツウ」を、違う角度から考え直すこと。異なる文化・社会の光を通して、自分自身の姿を「再発見」すること。これこそ、異文化、社会について学ぶ楽しさであり、大切さだと思います。では、実際にフランス社会をきっかけにして、どんな疑問が湧くかというところ…

<フランスの大学は学費がタダ同然である→なぜ日本やアメリカの大学は高いのか>、<フランスではストライキやデモがよく行われる→なぜ日本ではストライキがほとんど消滅したのか>、<フランスの大学には化粧をしなくても学生がほとんどいない→日本の学生はなぜ化粧するのか>、<フラ



に西方中世の典礼史へと移ってゆき、現在に至っています。いうまでもなく中世は修道院を中心に、聖母崇敬、聖体に対する信心、グレゴリオ聖歌といった豊かな典礼文化が花開いた時代でもあり、その多くは形を変えて現代にも受け継がれています。この時代の典礼を神学的な見地から研究することは、ひいては今の時代の典礼を見つめ直すことにもつながるのではないかと考えています。

とはいえ、まだまだ基本文献の素読およびいくつかの個別テーマの資料収集に着手したに過ぎません。今は、グレゴリオ聖歌の膨大なレパートリーの中から、聖母賛歌などを個々にとりあげ、その歌詞を「典礼文」として捉えなおし、典礼史のなかに位置づけたうえで、その霊性や神学を読み解くことをとらへずの研究目標にしています。

	専攻分野は「典礼学」。長期研究テーマは「西洋中世典礼史」。主な著書は「Ad nuptias Verbi. Aspekte einer Theologie des Wortes Gottes bei Ambrosius von Mailand (17ThS 69), Trier 2003」。担当科目は「組織神学（経路論）」など。
にしわき・じゅん	人文学部キリスト教学科助教

専攻分野は「典礼学」。

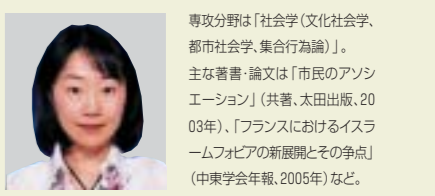
長期研究テーマは「西洋中世典礼史」。

主な著書は「Ad nuptias Verbi. Aspekte einer Theologie des Wortes Gottes bei Ambrosius von Mailand

(17ThS 69), Trier 2003」。担当科目は「組織神学（経路論）」など。



これは私が、いつも教室で繰り返していることです。授業ではフランスの社会、都市、移民、階層の問題を扱いますが、それらを「遠いヨーロッパのできごと」と傍観するのではなく、できる限り日本の状況に照らしあわせて考えようという心がけています。ですから授業名は「フランスの社会」ですが、フランスはあくまでも出発点であって、実際には日本のことを話すほうが多いかもいれません。フランスに関心のある人もない人も、ぜひ一度参加してほしいと思います。



専攻分野は「社会学（文化社会学、都市社会学、集合行為論）」。主な著書 論文は「市民のアンジェーション」（共著、太田出版、2003年）、フランスにおけるイスラームフォビアの新展開とその争点（中東学会年報、2005年）など。長期研究テーマは「マイノリティ」と文化的抵抗。担当科目は「フランスの社会」など。